

【翻刻】

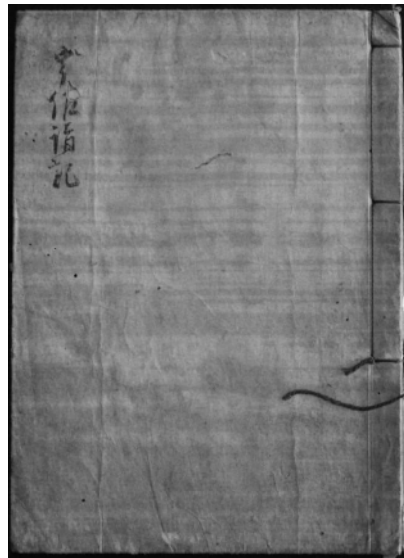
奥嶋六郎太夫景就著「宇佐詣記」

中田 敏子・山口 敏幸

〔凡例〕

- 一 本史料は、長崎県佐世保市中里町奥島家所蔵（目録番号2101）奥嶋六郎太夫景就著「宇佐詣記」を翻刻したものである。
- 一 底本の丁の改頁は／で示し、当該箇所それぞれ丁数とオ（表ウ（裏）の記号を附した。
- 一 底本の翻刻に際しては、基本的に原文のままを原則とし、底本の宛字、かな遣いなどそのままにした。固有名詞、地名を除き常用漢字に変えた。
- ・ 読解の便宜のため読点（、）と並列点（・）を適宜ほどこした。
- ・ 読みがなは、底本記載のままとし、読者の理解に必要と思われる箇所には、新たに（ ）の中に読みがなをつけた。
- ・ 文字の異同、誤り等について加えた傍注は（ ）で示した。
- ・ 変体がなはひらがなに改め、濁点の有無は底本に従った。今、^{より}而、二而、^て江はそのまゝ使用した。
- ・ 底本で虫損などにより、判読が難しい箇所は□で示した。
- 一 この翻刻は、佐世保古文書解読研究会（以下古文書会）の例会で読み合わせた原稿をもとに、中田敏子氏（古文書会）と山口（古文書会）が、補訂を加えたものである。補訂に際しては、古文書会（寶龜道聰氏・豊島幸子氏・神田勢一氏）の協力を得た。
- 一 読者の理解に資するため、適宜註を加えた。注の作成に当たって、平戸松浦史料館の久家孝史氏、佐世保古文書会寶龜道聰氏には、資料の提供や助言を賜った。各氏へ謝意を表したい。

タテ二三・八cm×ヨコ一七cm 表紙黄色厚紙 三〇丁 裏表紙張り
紙内側に書き込み（おたる但代金、ひ鯛一はこ） 虫損少々あり
左肩に打付書で「宇佐詣記」 序文、奥書き無し



表紙

（二丁オ）

奥島氏

○ことし文政二のとし菊月十一日朝五ツ時薦菜の宿¹を打立、僕平次郎なるもの只一人を召具して御厩の波戸^江至れは兼而約せしゆへ佐世保の大谷忠藏²も来りぬ、白濱の船を借りて同じく田平^江渡りぬ、けふ八空も半ハくもり半は晴れしゆへ寒温も道行身³にかなひていとよろし、佐々までゆきて古川の廣川宴私³の宅^江行てとまりぬ、大谷忠藏ハ此所より別れて直に佐世保³歸りぬ、廣川氏の宅ハ前ハ佐々川流れ、向ふハ田原稻刈る農夫とも行かふさまながめいとよし

○十二日廣川氏にていろいろもてなしに逢ひしゆへ日たけて此家を立出ぬ、川を渡り田畝の中を過てまさる越を躰³へし也飯盛山と本街道の間、山谷をこゆるなり、本道より道のり近し／

（二丁ウ）

扱飯盛の社に詣てぬ、此山の頂上にハ愛宕の神おわしぬ登り詣てたり、此所よりハ四方見はらしよろし、此山を下りて川下の村を過ぎ弓鏑越といふ野をこへて佐世保にいたりぬ、佐々より四里に近しといふ、ゆミやりこへハいと嶮岨の道なり、佐世保^三てハ酒造家の富田六右衛門宅に宿せり、今夜は大谷忠藏も来り又譜代の家来其外しるべの者なと三人四人家内の者までもきたり集ひて、もてなし共せし也

○十三日富田が家を朝ゆるく立出ぬ、譜代⁴の米倉五八てふものは早岐まで見送り^二とてともに来る、九ツ時過早岐に着ぬ、庄屋に泊りぬ、夕方ハ郷医⁵の平田玄徳の家を訪ぬ、江田十三右衛門なども来りて数杯の酒に及ふ、今宵は雲晴れ月も明らかにして夜／

（二丁オ）

景いとよし

○十四日朝かれい過る頃より三河内に行ぬ、今村楚八⁶を問ぬ、此人は御焼物師棟梁にて過し年頃より懇志にせし也、此頃風邪に侵され打臥いたりしよしなれハ暫時逢し也、忤も土太といふて十五六才計の童なり、是も病にて打やつれいたり、直^三三ツ峰の明神・天満宮・焼き物の窯所など見物せり、楚八よりい、おこせしよしにて、御焼物師今村平助来りて所々^江ハ案内せし也、捻物師^{〇ねりものし}棕尾兵吉の宅^江行、酒麴共もてなしありし也、昼過^三又々里の庄屋へ帰りぬ、夕かたハ当所祭礼に付ての町中よりの狂言ならし大念寺へ有りしを行て見物せし也、後^三は同所^{（おき）}押木村幸右衛門殿の棧敷^江行て見たり、子息健次郎来居られ世話になりたり／

（二丁ウ）

狂言は二十四考^{（老）}といふもの、よし、村山熊蔵・前川与三郎・中村彦治郎などいふ子共役者所作よろし

○十五日浄漸寺にまいり八十八ヶ所石仏巡覧しぬ、此後山ハ古城趾にて眺望もよろし、是より廣田の住吉明神^江参詣せし也

昼過にハ又々大念寺にて狂言ありしゆへ寺僧の棧敷^江行て見たり、今日ハ三日大平記といふ狂言のよし

○十六日朝早岐を立て有田を越へ夕七ツ時頃武雄に着き、鉄炮屋に泊りぬ、早岐より此里迄七里と云、筑前侯^{（松平備前守）}といふ長崎へ御越にて今夜当駅御止宿なり、鉄炮屋ハ御用人齋藤三郎太夫宿になりたり、上下十一人のよし^二て若党四人牽馬一荷指の具足箱なり、夕方本陣も御宿入^二御行列見物したり、御先鉄砲五挺／

（三丁オ）

台弓二掛・御先箱白熊の対鏑・御打物・御徒士五人・御刀筒・御駕廻り士五六人位御引馬二疋、御具足指二荷御同勢も少く至^而御手輕なり、御家老ハ野村新左衛門、伊達道具もなく、指具足台弓位なり、宿内幕宿九軒か十軒計もと見ゆ、右之者鉄炮屋^江齋藤泊

リニ付余ハ裏手の別家の二階に潜ミ居たり、旅籠百六十孔

○十七日五ツ時頃武雄出立、途中にて久振^{二而}雨少々降、佐賀入口にて筑前の黒田美作¹⁰長崎^江出候^三行逢ふ、対道具・見越鏑・具足一荷・台弓一張長刀・引馬一疋供駕二挺外乗掛少々ありしなり七ツ時過る頃佐賀城下^江着ぬ、大神宮¹¹参拝、伊勢町帯屋に宿しぬ、是迄八里と云、旅籠百七十孔

○十八日五ツ時過帯屋を立、いせ町升屋^{二而}元結共ととのへぬ^{（極上の品一かな四孔）}／

(三丁ウ)

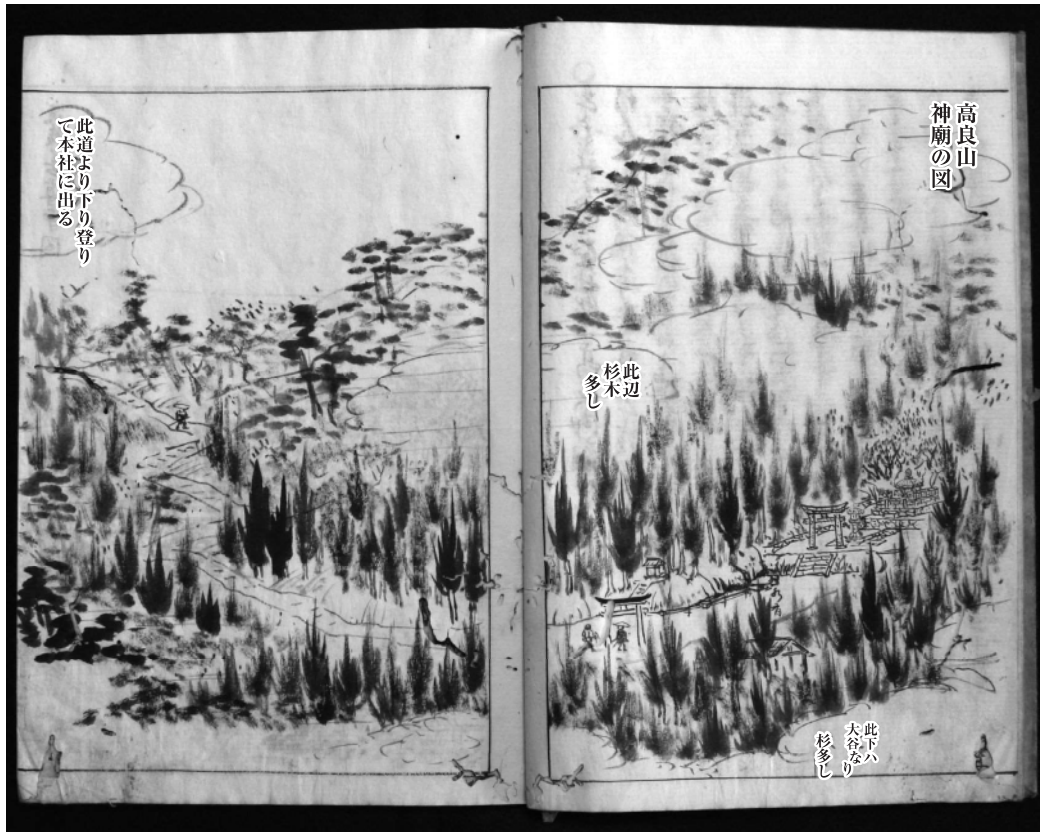
夫々春の町先、神崎迄の間に姉村といふ所分脇道へ踏分、久留米のかたへ趣きぬ、神崎通り行けハ久留米迄七里、姉村より六田通りなれは一里程近くなるといふ、姉村より豆津の渡しニ出る、此川渡れハ瀬の下といふ所なり、こ、より少し行けバ久留米城下なり五穀神社¹²江参詣、此頃祭礼中とて近境の人来集りて殊の外賑やかなりし、芝居・見セ物・人形あやつりなと様々ありし也、此所を打過直¹³府中に出て高良山鳥居前嶋屋¹⁴宿せし也、佐賀城下にてハ願正寺¹⁴江行て見る、龍造寺八幡¹⁵江も詣しぬ、又日峯明神¹⁶江も至りぬ、近年太守分御信仰¹⁷銅の鳥居・石灯籠共献せられ、家中よりも石灯籠数々寄進ありしと也

○十九日六半時頃府中を立出、高良山¹⁷江登る、鳥居より十八丁／

(四丁オ)

にて本社¹⁸至る、本社脇に高良御廟¹⁹八丁と傍示立²⁰あるによつて行見るに山の頂より下り路にて後の谷へ三町計も下り、杉谷の中に石の玉垣に石塔の笠石と地台石を重ね上に少しき五輪の宝珠の如き石あり、前には石の鳥居、木の鳥居も建たり、谷の下²¹は行者の籠る所も有りとそ、扱本社の所²²立戻り石階²³の下より善導寺¹⁸江行く路有り、此所を下れハ追分といふ処に出る、家廿軒も有らんか、夫より善導寺²⁴詣しぬ、寺ハ大きなれとも淋しき所なり、吉井村²⁵出る、家五十軒も有らんか、追分²⁶六里と云、是より二里にして保木村²⁷至る、道脇家四軒あり、此所²⁸泊る、此辺ハすへて民俗野鄙にして、宿せし家もいといふせき所にそ有けり、府中より此所迄八里余、旅籠百三十孔なり／

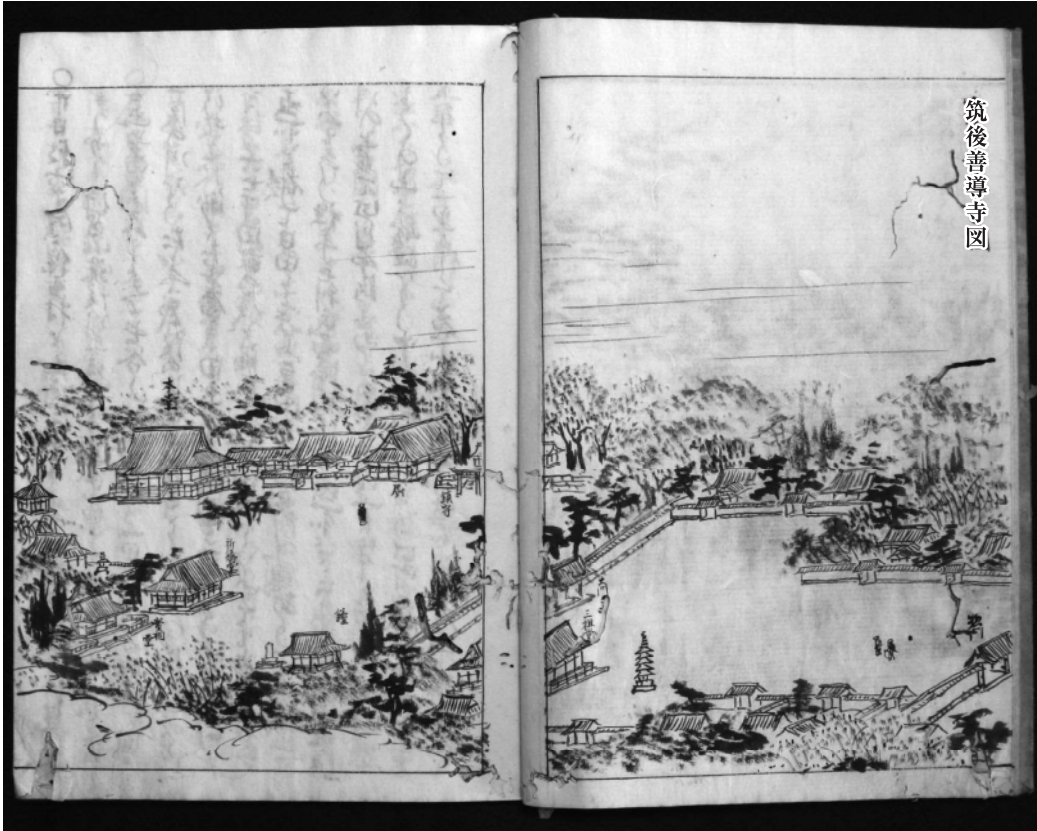
(四丁ウ)



(五丁オ)

（五丁ウ）

筑後善導寺図



（六丁オ）

（六丁ウ）

○廿日朝六半時保木村を立て三里にして豊後日田なり、保木村より少し行けハ筑後川上流なり、箕手^{ミノテ}ニ曲がりて岩澗の間を流れ通る幽景いとよろし、夫々長谷といふ処を過る、一里計の間兩岸の間を一流の川なり、たとへハ武陵の溪曲に桃なきといわんかことし、此の谷間を行拔れば、渺々たる広き田原を通り過ぎ、隈町といふ余程の町家なり、六七丁田畝の広^ミを隔て、豆田^{マメダ}町といふ、是も家余程有也両所を都て日田と呼ふ、豆田に御代官所の廳あり、此辺りニ城山といふも有り、往年毛利氏居城なりしと此所^ミて云し、此日田筑後川の上にて此川筋流れ出るのミにて、四方ハ皆々屏風立廻したることくの山々嶮岨なり、中ハ一面平地なり、此町を行過き段々山間江登りて一里にして花山村といふ有り、此所より彦山江踏分路有

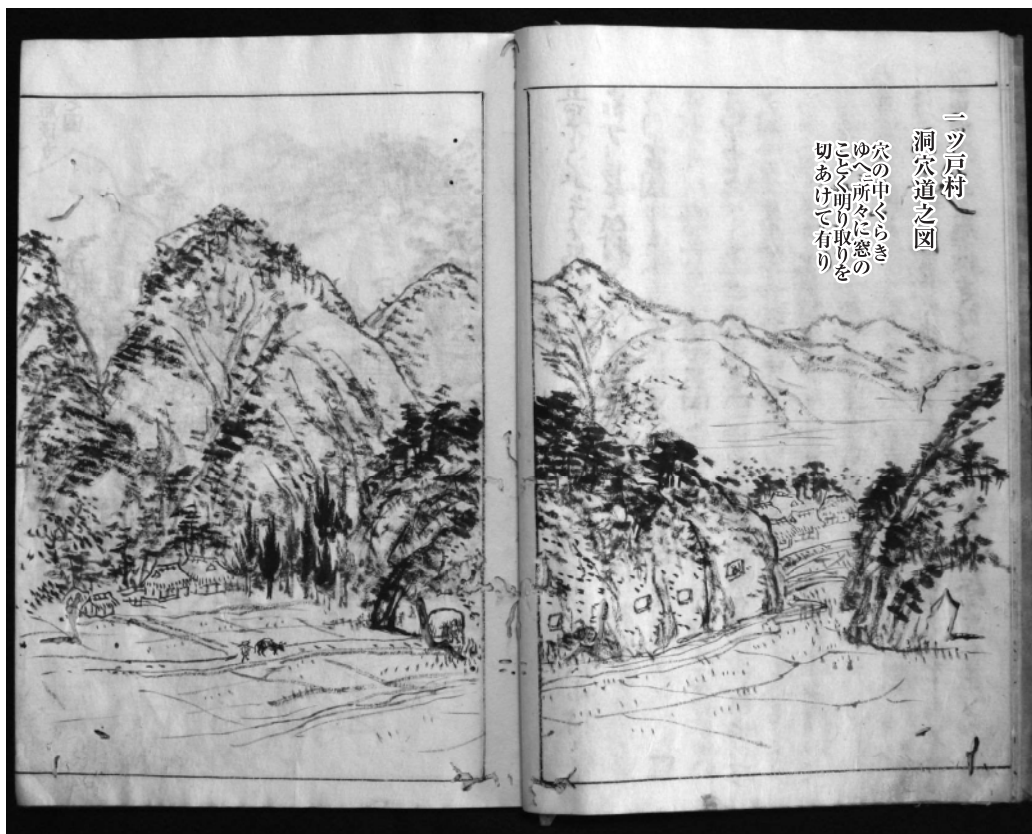
（七丁オ）

五里といふ、是今段々山に登る途さかし、峠に登れば伏木村といふ、家少々あり、此村を下りて縄木村^{なわき}・一ツ戸村など様々の小名の所有り、宮園と云所迄至りて宿せし也、日田より六里といふ、保木村よりハ九里計也、此宮園も家少し計^ニ而、何レも百姓家といふせきうちにて久留米の濟家宗僧と相宿せし也、此前の一ツ戸村には岩山を切抜て中を通り過る穴道^{アナミチ}あり、十七八間も有らんかと思ひぬ、牛馬荷付けしも皆此洞中を通るなり、岸上は古木生茂れり、いとめつらしき穴道なり

○廿一日宮園村を立出、一りにして沓^{くつ}の林と云所に出る、此の所より羅漢寺^ニ江の近道山越へ也、沓の林よりさいの原へ一里、さいのはらより一里にして羅漢寺なり、此間すへて山間の路にてあしし、扱は

(七丁ウ)

一ツ戸村
洞穴道之図
穴の中ぐらき
ゆへ所々に窓の
ことゝ明り取りを
切あけて有り



(八丁オ)

(八丁ウ)

羅漢寺
之図

此下三川流あり
村里も有り



(九丁オ)

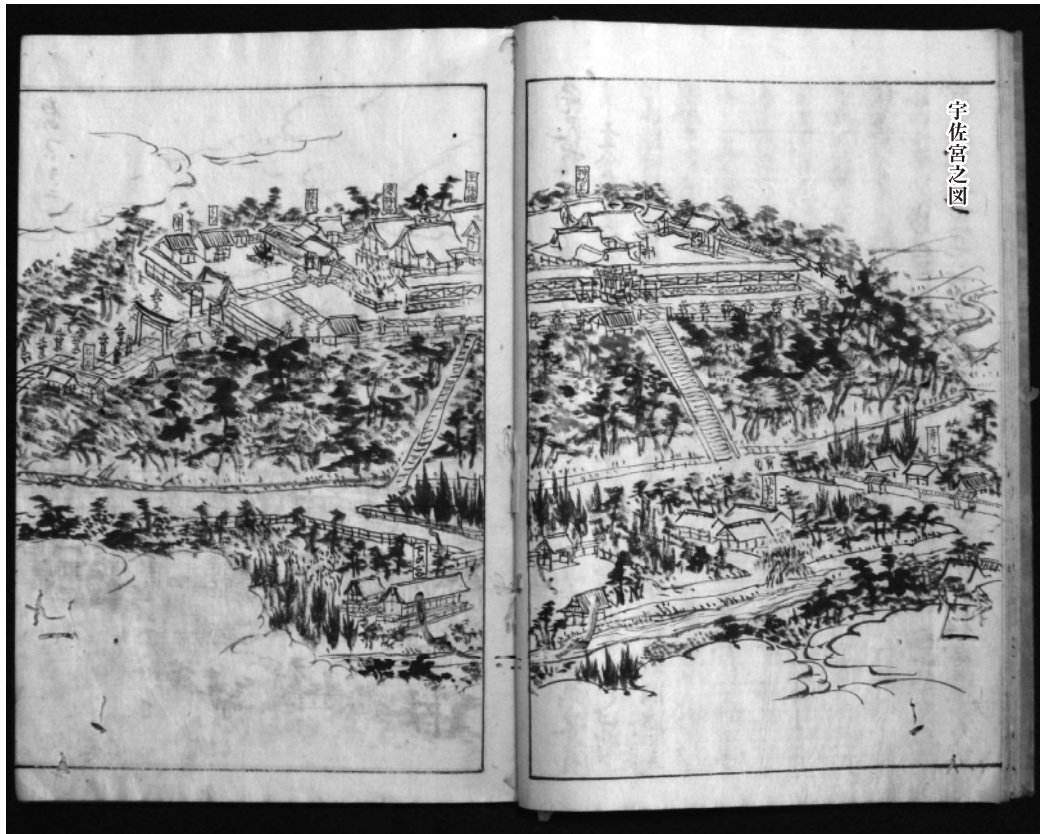
（九丁ウ）

羅漢寺ハ聞及しよりも奇なる所なり、曹洞宗にて総寧寺の末
といふ、本堂方丈厨共ニ大方岩の下にくり込て作りたり、屋根の檐
先計岩より出る位也、屋根の上にハ菊桐の紋を出す、一段上之方
に経蔵あり、輪蔵なり、三十三仏堂もあり、本堂座敷十畳二間
大方岸穴の内なり、山門鐘楼など皆岩岸によりて作るゆへいと
奇絶なる也、門前の路甚タ峻嶒にして石段もつき難き所間々
あり、石仏も古佳也、洞の前も岸急なるゆへ通路付けがたき所
ハ板にて椽のこつく椿へたり、老人子供の参詣するにハ危く思わる処
なり、本堂の前より山門迄ハ下ハ岸急にして谷間古木杉
多し三抱に余る程の杉数々有り、岸の下くれ抜けて石門の上を
通り石仏共巡拝する所もあり、けふハ門前の姥来り案内／

（十丁オ）

にて見廻りたり、絵図縁起も板行にせし有るなり、門前の農家に入
りて昼食なとした、めぬ、松茸此辺ニ生るとて吸物に出せし也、此所よ
り山踰へにて阿蘇と云所に出る三里といふ、家六七軒、此辺りハ都
田舎にて道筋の家もあしく宿を借るとも皆々農人の家
外ニ旅籠屋とてハなきなり、阿そより二里にして四日市
に出る、此所ハ町家大ていニありし也、阿蘇より一里計出れハ山谷
を出はなれて田畝の所に成り漸く平地になる、四日市辺より
豊前の海見ゆるなり、防州地も遙に見ゆる、豊後の日田へ登りて
伏木村より段々水流に傍ふて高山の間を下るに信州の木曾
谷のことし、沓の林村より山一ツこなたに越て段々両山の間広く
なる羅漢寺辺りハ皆高岸計多き也、四日市若松屋に止宿す／

（十丁ウ）



（十一丁オ）

(十一丁ウ)



(十二丁オ)



(十二丁ウ)



(十三丁オ)

○廿二日 此度宇佐参詣こゝろさして出しゆへ今朝ハ髪結び湯あミ
して五ツ時頃四日市を出ぬ、宇佐まで壱里、田原の平地なり、中間
にやつくわん川とて船渡し有り、宇佐の宮地ハ一体の地面窪き様の地
ニ而、中に少しの小高き山にて亀山といふよし、入口廊下橋・金の鳥居・
楼門有りて此前に宇佐の町ハ四五町も有り、田舎の淋しき所なり、
廊下橋を渡りて堂社数々有り、広き馬場のことも有りて其先ニ
下の宮拝殿有り、宝殿も元ハ三ツ有りしよしなれとも今は一ツ有り、此所
より段々敷石を登りて本宮なり、鳥居も有り、左の脇手より上る
回廊あり、勅使門有り、拝殿・祈祷殿・本殿ハ三所にして中ハ玉依姫、右
神功皇后、左応神帝まします、回廊の左右の中に随身の木像
ありし、左に赤袍を着し、鉾ほこを持つ、冠を着る、右ニハ黒袍にて／

（十三丁ウ）

弓箭を挟む、何れも垂纓にして卷纓にあらず、をいかけもなし、衣冠の体のことくにして奴袴のときを着す、奴袴の色淺黄 いろいろかと覚へぬ尋常の隨身とハ甚タ異なりぬ、大宮司の家二軒ありとぞ、宮成大部とい、（到津）糸津大貳とい、両家なり、宮成ハ以前より大宮司の旧家のよし、糸津氏ハ新家と云、此家より年々勅使代を勤るよし、両家とも同格にして一人宛七年限に当番を持といふ、神領ハ高千石にて大宮司両家にて支配するよし、下杜家数多有りて杜僧も多きよし也、真言宗にて別当寺とてハなく、皆々大宮司重に杜務を司ると也、京都よりも臨時の節ハ勅使被指向候に、此糸津の宅^江止宿せらるか先例とぞ、此十六年前、四辻殿京よりご参向有りて宇佐に七日滞留有りしが、殊之外所の物入にて今に其節の借金残り夥しとき、し也／

（十四丁オ）

入目ハ皆神領千石の内にて賄ふ事のよし也、勅使の節ハ豊前椎田宿りにて、大貞の八幡大宮司宅にて昼休有りて此宇佐^ニ着の先例と也、大貞の大宮司と宇佐の大宮司とハ元と兄弟の家筋といふ、扱此宇佐御祭礼ハ六月晦日にて、神輿渡御にて大宮司糸津の宅脇に仮殿有りて此所に行幸有るいふ、九月廿日、廿一日^ニも神事有り、廿日^ハ音楽、廿一日^ハ能^{のう}有るよし、けふハ若宮預りの社主、矢部撰津守の嫡子のよし伊与とい、童子、途中にて逢、直^ニ案内に頼^ミ、所々巡覧せしゆへ残りなく連廻り見せたり、本社の後手の下の方^江御加持の水とて三ツの井有り、三ツ共^ニ水色清濁のかわりあり、いづとても同様と也、其井三ツ共わづか一間計も隔りて水各異なる也又宇佐の十景とて有ると也、其所上宮の春朝、下宮の冷水、馬場の／

（十四丁ウ）

桜、馬城の峯雪、菱形の藤、千歳の松、月瀬の河螢、大尾山月、下井の納涼、頓宮の新秋、いづれも歌もあるよし也、宇佐の富とて月々定日ありて遠近人集るよしなれとも、此頃^ハ一統不景気になり夫故神領も困窮とぞ、巡詣しまい下宮して又々四日市のかた^江立帰りし也、此間一り也、若松屋^江寄りて昼飯酒など調へのミしに酒も大かいなり、是今三里大貞と云所迄行きぬ、家七八軒有り、茶屋の直右衛門と云もの、宅^江泊りぬ、大貞の八幡ハ杜領百石、地方にて細川三齊公此地主護の節より建立となり、其後黒田家中津在城の節も御信仰有り、当時奥平家^ニも同様にて旧にかわらず御造営となり、廊下橋・楼門ハ三齊公の御寄進とぞ、大概の宮なり脇に大なる池有り、蓮なとうへたり、此前年飛鳥井殿宇佐^江／

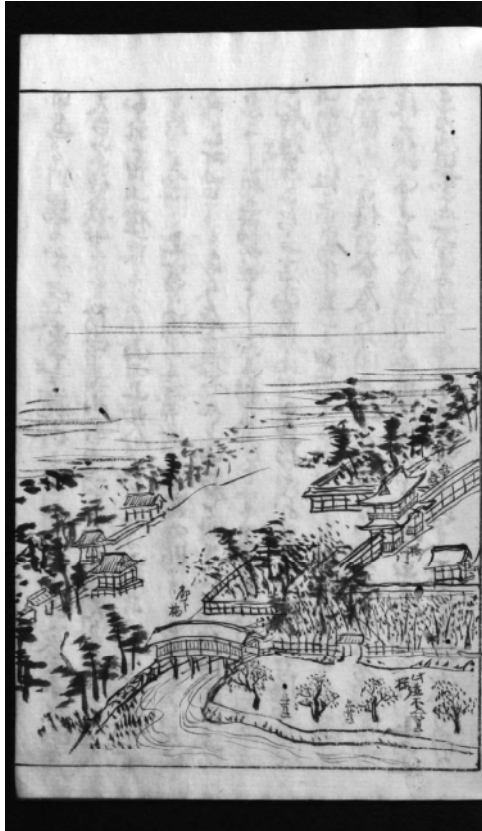
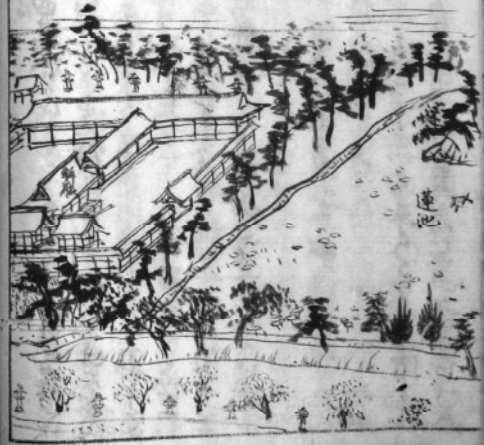
（十五丁オ）

下向の時参詣せられしと也、其後四辻殿^ハ代参にて自ら^ニ参詣せられすとぞ、勅使通行には何方とても造作失費多きとぞ、此大宮司の家^ニ昼休なる節杯も大^ニ入目か、り迷惑の事どもと也、奥平家^ニても役人何角出役^ニ物入りも大方ならずと宿の亭主咄せしなり、四日市旅籠百六十孔、此四日市^ハ豊後ゆす原八幡^ニへ十一里、大貞より中津城下へ一里、小倉^江十三里、彦山^江九里計、宇佐へ四里也、大貞^ニ旅籠百六十孔

○廿三日朝大貞を立出て一里高瀬といふ所也、中津^江も踏分道有、一里に近しと云、此辺中津^江の踏分道段々有りし也、中津城下道右に見ゆる、垂見村杯といふを過る、此辺一面平らかなり、中津も平地の中なり、城とても平かに見ゆる、道今直^ニ見ハ十四五丁もあらんか／

(十五丁ウ)

大貞
八幡宮



(十六丁オ)

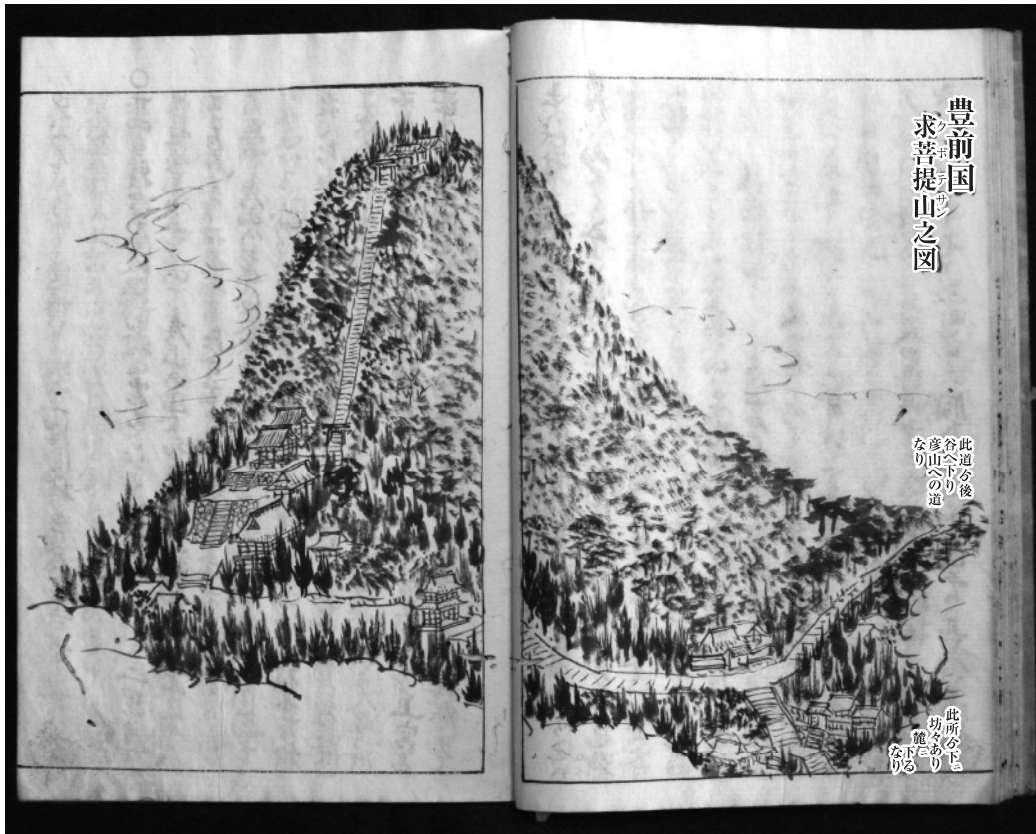
(十六丁ウ)

此辺今川端にそふて求菩提山くぼてさんといふにさして登る、此山は天台宗修験にして防中ぼうちゆうも山上に二十軒余も見かゝりに在し也、本社ハ白山権現にして山の上九合位の所に宮有り、其辺に堂舎も段々有る也、上宮ハ頂上にありて中宮の脇より真直ぐ登る事三町計も有らんかと思わる、山石をかさねて石階とす、至而急にして二階のはしごに登るがごとし、上宮も拝殿宝殿有る也、一体聳へたる高山にして大杉其外雑木楓の木極多し、此節ハ紅葉最中にて望いと美景なり、此所参詣して直に山越して後の谷底へ下る、路又嶮なり、茅葛の広野にて尾花の中を分け下りて澤田村といふに出る、家少々あり、山の上より此所迄一里に近し、前の高瀬村今求菩提山江四りな

(十七丁オ)

れハ此村迄五里計なり、宿せる家もいづれも農民の家なれハいといふべく、今ハ収納の最中の節なれば家内取ちらし糠塵ぬかちりの中に臥せし也、家内にも産婦も有りて病人と一間に寝ぬ、借りし夜具も薄く夜中さむさにハ困りし也、此家の老翁の話聞くに求菩提山ハ名所も段々有るゆへ案内なしにハ知れすと、法花経軸といふもの岩窟の上に自然に有りて下之方より仰き見る事といふ、又籠り水と云所ハ地中に滝水の落る音こも忽たちまち地を割て涌出ることきの声、地上に聞ゆれとも上ハ水なしとぞ、此外ほらも奇異の所も有りといひし也、知らずして尋ね見さりしハ残多し、又羅漢寺の近き辺に掘抜し一ツ戸村の穴道の如き所、長サ三町計の洞道有るよし、此節ハ其道を通らす

（十八丁オ）



（十七丁ウ）

（十八丁ウ）

ゆへに見さりし遺憾なりき、澤田村にて旅籠百五十孔たべ物
いとあたし³²

○廿四日朝六半時頃澤田村の宿を出て帆柱村にいたる、二里計のよし、
帆柱峠といふを過て彦山の山に登る、此間一面茅原にて一筋の道、
茅左右より指掩ふてたけ高き故、遙に向ふの高ミなとより外ハ
見えず、彦山の麓ハ必険なるにもあらされども、登る事幾十
町ともなく渺々たる茅野に登るに九合計にして杉木古樹

森々たる所に至る、是今山中に入る也、間もなく豊前坊の権現まし
ます、本社ハ岩穴の所によりて作りたり、社番する山伏一人有り、此
所より彦山本社迄山の横、中ふくを廻り防中に出て夫今上宮迄
六十町登ると云、合て二里二余る道法と云、又此豊前坊社脇より／

（十九丁オ）

上岩間の小路を伝い登る時ハ、山の背峯通りニて本宮迄六十町と
云、是を法体越といふよし、近道なるゆへ予も此道に登るに、いか
さまき、しことく岩石の急なる所を木根を攀ち草蔓をつ
たひてやふ／＼に登る所五六丁もあるへし、夫今頂上に至れば
岩石の上なから峯の頂上を伝へて行事五十丁余の間なり、
皆惣峰の頂上のミを通る事にて、東の峯端より西の頂まで歩ミ
終る所上宮なり、此間とても皆嶮岨なり、古木大杉一面に生茂りて
其間夏木の葉落し間より四方も大概に見ゆる、豊前・豊後・筑
前・肥前共ニ見ゆる、九州一の高山なると云事さもあるへしと思ひ
ぬ、頂上の所至上宮有り、宝殿拝殿皆銅瓦にて大抵の宮なり、社頭に
ハ佐賀候の御定紋付あり、地所も岩石の上纔なる平地故、本宮拝殿／

(十九丁ウ)

のミ漸く建し位の地なり、此廻りハ古木杉多く立たり、此所ハ宮番の人
もなし、此所より下るに坂段大がい切石にて作れり、登れとも大岩
さし出て石段付かたき所には、鉄の鎖りをさげて是にとりつき
て登り下るやうにせし所も有り、本宮より六十町下りて講堂

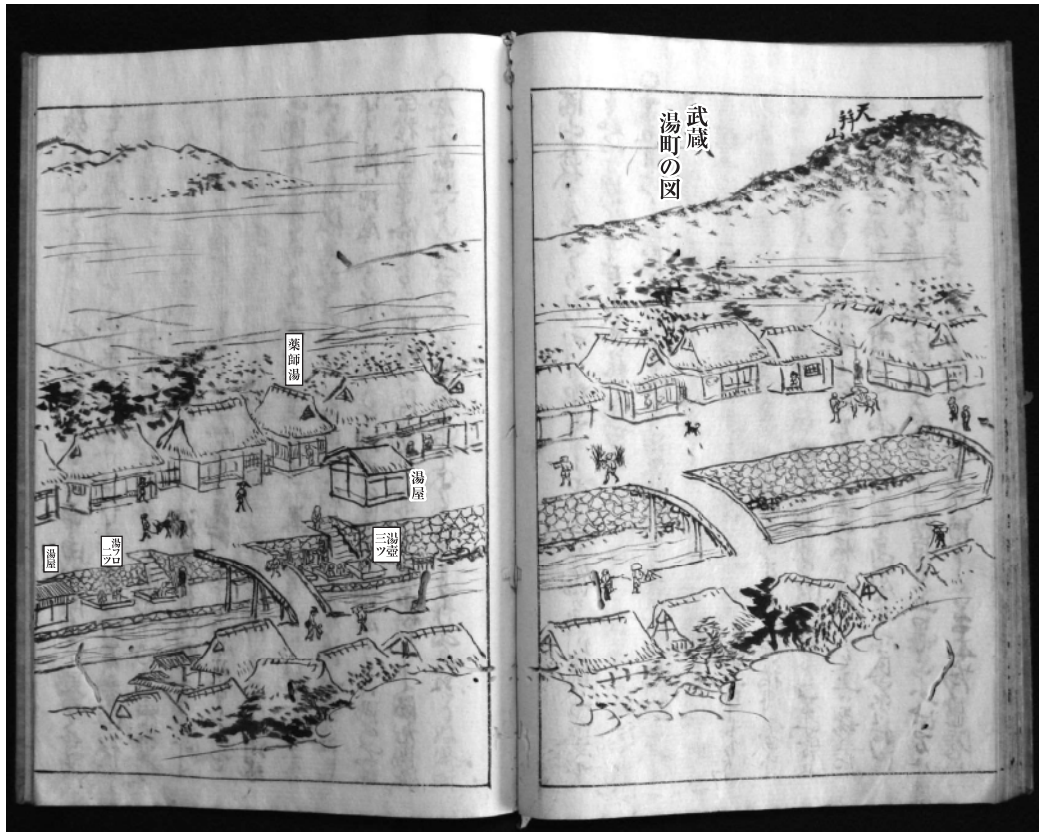
あり、大堂なり、下の宮といふも有り、鐘楼・山門・大鳥居・諸堂数々
あり、此下に座主の寺・坊舎・寺院両脇に数多見ゆ、町家も横手の
所數十軒有り、皆商人なり、是合下段々人家有り、寺中の者^{二面}
亭主皆剃髪せし者也、此所合や、下りて小石原といふに出る、人家
宿屋も有り、筑前福岡領のよし、甘木屋利八といふもの、家に泊りぬ、
彦山合此所迄三里に近しと云、小石原より少し東に長谷といふ杉
山有り、半道程もつゝきたる山間なり、杉木大サ三抱四抱も有らん
かと思ひぬ／

(二十丁オ)

満山大杉と見へたり、折ふし切出しけるに余多川流へついで下
すやうすなり、甘木屋旅籠百五十孔

○廿五日六ッ過頃小石原を出て田畝の所少々過ぎ行、谷川を伝へて
下る、四里計也、兩岸狭く小道にて左右草生茂り、殊更朝霜白く
敷、雑木の葉落散て路筋も分れがたく間々有りし也、二里計も下り
て谷間に人家田畝の所少々有り、此辺合一り計にして秋月の城下
なり、町より少し下之方、往還の道也、町屋も少しハ通り過るに茅葺に
して淋敷様子見ゆ、城主の御屋敷も山の脇にありとぞ、上ハ森々た
る古木の高山なり、一体此辺ハ山に依りたる田舎にて民家もあし
く見ゆ、紙を漉く家多し、小石原より秋月迄五里といふ、此間ハ
路も必嶮岨と云ハあらざれとも至てあしく、草木茂りし頃ハ／

(二十丁ウ)



(二十一丁オ)

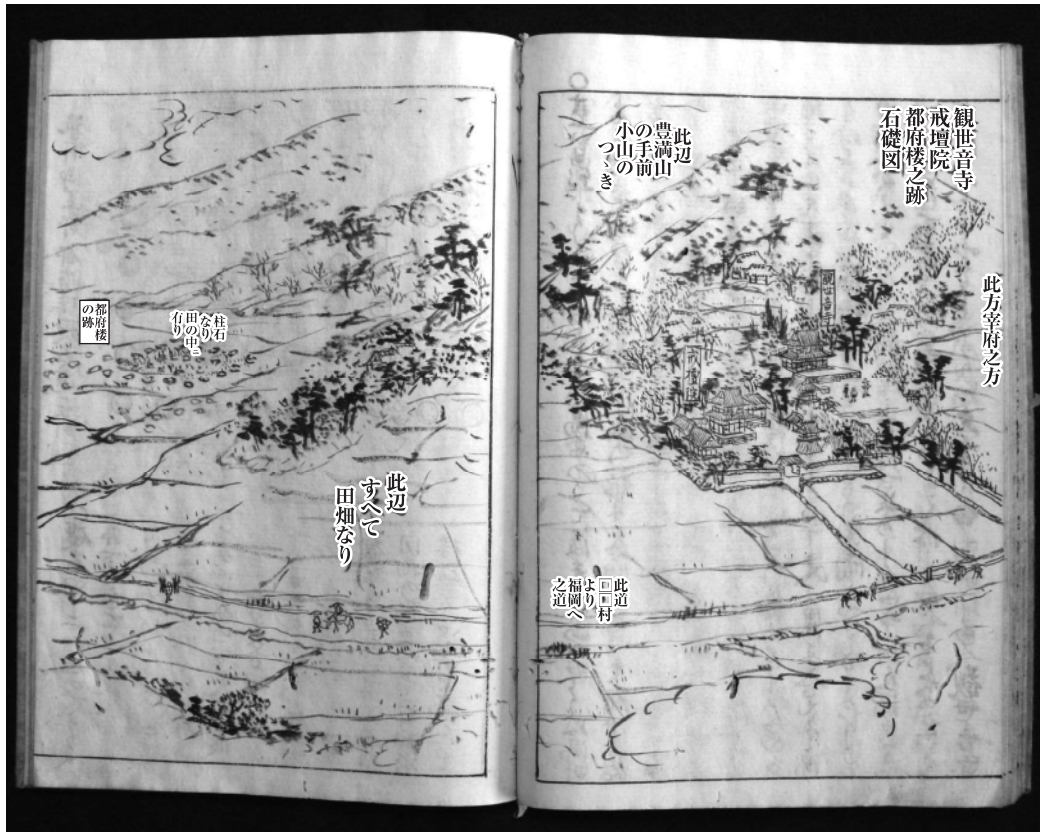
（二十一丁ウ）

路分ちかたかるへしと思ひぬ、此辺より平田打開けて見ゆるなり、是今四里計にして山家の宿³⁴しこなたに出る、此間に日田松崎江通る往還の道あり、筑後・肥後・薩摩杯^江の道なりと云、山家のまへより原田と福岡の道有、追分なり、福岡の往還脇より十町計も武蔵の湯町³⁵によるなり、小石原今湯町迄十里余になるなり、秋月今ハ路も平場なれとも短日ゆへ漸く黄昏^{たそがれ}に湯町に着たり、川端の酒屋に宿をかりぬ、温泉の直上ゆへ直浴³⁶せし也、湯ハ所々に有る事^三川端にも数ヶ所有り、水涯に箱をうつめて湯ふねとせしなり、湯ハ地底より涌出る事にて町並の湯場ハ地面よりハ湯の所迄余程下りて浴する也、塚崎の湯よりハおとれり、宿せし酒屋湯床屋^二曾六といふ、老父ハ左八と云いふてよくいたわりくれぬ／

（二十二丁オ）

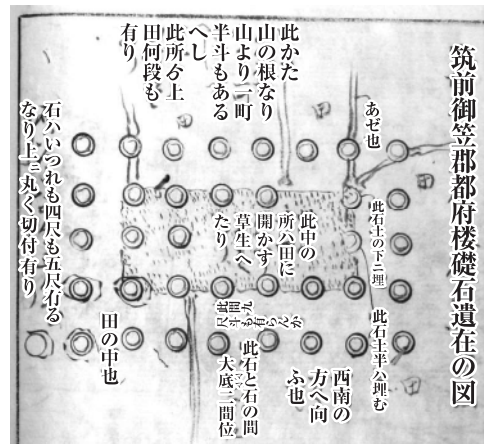
○廿六日朝より空もくもりぬ、湯に入りて後、天拝山に登りぬ、湯町より頂迄十四五丁も有ぬへし、山の根に天満宮あり、其脇に清瀧庵といふ小寺有り、清泉落る庭中に衣掛石といふ小高き石あり、菅丞相衣をかけ玉ふと云、此所今漸くに登る、松樹雑木の山なり、此辺ハすへて平地の所に高き山にもあらされとも四方よりよく見ゆる山也、箱崎福岡辺の海上迄も見ゆる、頂上にも天満宮の小祠有り、山を下りて又々湯に入れとも湯もぬるくして塚崎のかたを思ひやりぬ、雨もやミまになりしゆへ支度どもして湯町を立出ぬ、一里にして宰府天満宮にいたりぬ、此所に来る頃ハ雨ことにつよく降しゆへ、鳥居の前なる大津屋といふにと、まりぬ、夕方^三雨も歇しゆへ観世音寺／

（二十二丁ウ）



（二十三丁オ）

(二十三丁ウ)



○礎石四十二此図の所より外、下の方所々に散乱せるなり、上のかたには二三也二重座に蛤羽に丸く切付有り、下の四十余の方ハ大概一段座に見ゆ、大方田の中にあり、半ハ土に入、或ハ傾覆セしゆへ分りかたきも有、観世音寺の門前も三ツ同物の様に見ゆる有、都府楼跡より四五町も隔たり／

(二十四丁オ)

戒壇院・都府楼の跡に行て見る、観世音寺の額ハ小野道風手蹟、脇阿弥陀堂有、額ハ弘法大師の筆、南無阿弥陀仏と書す落款あり、此所迄十町計もあるへし、戒壇院もともに古跡にして両方共仏像何レも古佳いわんかたなし、此辺より少し行過て都府楼の跡、道上へ田の中に礎石の大なる自然石の上に柱の居る所を丸く蛤羽に切りたるもの上の方へ三十二、其儘に遣れり、下の方の田の中に四十二程見へかゝりに散在す、上の方二十三は、皆二重座に切たり、下のかたに所々有るハ一重座なり、古きもの、遣りたる物^二而、大なる殿堂の有りしものと思われぬ、此辺ハ山の麓にて向ふハ片下りの土地なり、菅公此地^五謫遷の時だにも都府楼ハすでに無ししよし、しかるに／



(二十四丁ウ)

其石すへハ儼然として遣れるこそふるきむかしの忍ハる、事也、此辺田の中^江ハ古瓦^{かわら}かけ所々にのこり有るなり、大なるハ無しとそ予も小サキを二ツ三ツ拾ひ取りし也、宰府大津屋旅籠百六十孔、此辺見廻り立帰るぬ

○廿七日前夜より雨折々打降ぬ、しかしとゞまるへきならねバ此処を立出でぬ、天満宮へ先ツ詣てし、朝の御供共そなへしにや紅衣の僧数人読経し居たりし也、此所より一里半にして宇美八幡へ参詣す、是地ハ應神帝の降誕ましませし所とそ、産の宮と書せしと也、御うぶ湯の水とて水の出る所に石の玉垣をしつるふ、是即神の降誕の時御産湯になりしと云、今にも産婦此水を服すれは安産すとて、近境の人ハ是をうけて帰りいた、くとなり／

(二十五丁オ)

御宮もたいがい^江の所なりし此所より二里半にして箱崎にいたる、雨も小降なりしかとも風寒く途中いとさむし、箱崎八幡^江参詣す、夫より崇福寺^江詣す、綺麗なり、御菩提所にて寺の後に御領主の代々御廟所あり、丸く塚をつきて上三石碑を立ツ、尋常の墓にことなり如水公長政公の御墓ハ上屋しをて木の植たり、其外ハ御石塔にて野芝付なり、博多に行て生月問屋石倉屋^江も行見たり、県氏^江書状共もち来りし故、石蔵屋^江世話して川端町の紅屋武助といふもの、家に宿しぬ、平戸^江立石伊与の息東馬も、此頃遊学に此所^江滞留なりしゆへ、予の宿を訪来られぬ、石倉屋の手代なるものも来りて夜更るまで物語聞しなり、石倉屋亭主ハ周平といふよし、年行事勤るとそ、日々福岡町奉行役所／

（二十五丁ウ）

江出るよし、町奉行の宅に役替の時ハ役所も移し造ると也、諸役人も皆如此と也、郡奉行の役所も居屋敷ニ只今迄ハ有しかとも、此節御省略に付、別に役屋敷ニ役所出来て、奉行も其所ニ出勤になりたと話せし也、郡奉行の下ニ郡代五人有りて、筑前十五郡を支配すると也、家老も四千石働るとぞ、其上に二十俵の役扶持と云もの有りて、家老になれば役中八百俵渡るといふ、諸役共其役高に応じて渡さる、よし、石倉屋手代の咄せし也、旅籠百八十孔

崇福寺中
国主代御廟
所之図



（二十六丁オ）

（二十六丁ウ）

○廿八日朝石倉屋か弟なるもの見舞とて来りぬ、所々見物すへしとと、めけれども、往し年来りし頃近きあたりハ巡覧せしゆへ、五ツ時過る頃此所を立出ぬ、城下橋口天神にまふて、大名小路といふを打過ぎ通り町に出、城下を出はなれぬ、夫々姪之濱^江いたりし、是迄二里半といふ、此所より今宿へ一里、前原^江二り深江^江二り、吉井^江二りに近しとなり、今夜は吉井の川端の家に宿しぬ、此家にハ平戸のものも段々宿せるよし、宿の女房咄せし也、けふもきのふにかわらず西風にていとさむく道中困りし也、博多より此吉井迄道のり九里計になりしと思ひぬ、吉井より肥前濱崎辺迄ハ公領なりしが、去年より對馬の御領となり御年貢も正米にて納る事になりし故、ことしなとハ米作もよろしく勝手よきとぞ、公領の時

（二十七丁オ）

ハ米をうり金銀にて納る事ゆへ、何かに失費多しと宿のものい、しなり、旅籠百六十孔

○廿九日朝五ツ時頃吉井を立出二里半にて濱崎なり、末永直人といふ医者宅へ立寄りしに長崎へ行しとて留守にて妻のミ有り之事を聞けり此処ハ鏡江^江いで養文田^{やぶた}を過く、今日ハ唐津城下祭礼とて行かふ人多し、四里行て徳末にいたる、それハ大川野迄二里八町なり、此里の丈右衛門と云もの、宅^江泊りぬ、此辺元^ト水野公の御領なりしが、去年より小笠原公御所替り^{公義}ハ御引上^ケニ成りたり、天川村^{アマカハ}・まの川村^{マノカハ}・大川野村^{オホカハノ}・平山村^{ヘイザカ}などいふ処高壱万七千石程公領になり、豊後日田御代官支配所となりたりと也、吉井より大川野迄八里計の道なり、旅籠百六十孔なり、此村徳末位の所^ニ而家四十余も有らんか

(二十七丁ウ)

○晦日朝五ツ時前大川野を立、一里十五町本部といふ処^{もとへ}に出る、家三十軒計も有らんか、こゝより半道計前^{もとへ}桃の河といふ処有り、家大かいいにゆる、通り筋にてはなきよし、此本部^{もとへ}佐賀分の番所唐津よりの番所もあり、今ハ御代官支配なり、もゝの川ハ今里分^{伊賀守}三里といふ、本部分半道にして川古といふ村に出る、本部位の所なり、是より二里計にして武雄の宿なり、此間に佐賀へ踏分る道有、此通りを今里分もゝの川通りといふ、平戸分通るに武雄通りより一里程^{ほど}近しと云、今夜は先日泊りし鉄炮屋に宿しぬ、夕迄温泉に二度入し事也、筑前の武蔵^{むさし}の湯と違ひ清潔にていとよく覚へぬ、鉄炮屋亭主いふハ平戸へハ度々行て帰るにハ、江迎^{江出}猪調村^{いのつき}を登り西の岳を越て今里へ出、武雄^{むす}帰る^きこの間三里なり、平戸より／(二十八丁オ)

一日道にて度々往来したりと語りぬ、大川野分武雄迄ハ四里也、夫故昼頃^{（語）}ニハ予ハ着たり

○十月朔日此所にて湯治せんとてここにと、まりぬ、朝より湯屋江行^{はな}しに、所々よりの湯治にこせし人々余多ありて、様々^{はな}の話どもせし、傍^{かたはら}より聞もいとおかし、我宿の隣家二階に

は、上方の芸子のよしにて女三四人も居たりし、明暮絃歌の音共我ものゝやうに聞けるこそ、ワれらも鉄炮屋二階に居たりしゆへ、夜に入てなどハいとさわかしく思ひぬ、虚無僧の尺八を吹て物を乞ひあるくも、其声衰婉として訴るかことく悲むか如く是を聞も又おかし

○二日朝もとく起て湯に浴するに、曙^{あけぼの}を犯して来る人もまた多し／

(二十八丁ウ)

きのふまで有りし人も今日ハ帰るといふも有り、今日より初めて来り浴するもあり、逆旅の人を送迎するもかくこそ思ひぬ、隣家にありし三線の妓も打かわり入湯に来るに、咄しを聞に皆浪華南辺の者とこたへぬ、かしこより遙々の海山を越てかゝるひなひまで来るも、其身ハさも思わぬ風情なれとも、かたわらより思ひやれハ、時に逢へる芸子ならんにハ、なとかゝる遠の国所まで来る事あらんや、むかし唐の白楽天か湓浦にて、琵琶ひける妓婦に逢しもかくもありしなん

○三日湯ニも数日浴すれハ、きのふよりハ旅のつかれも少くなりぬ、日々外に事もなけれハ徒然にこそ暮らしぬ、過し日宇佐の宮詣せる事共思ひやるに、境地景勝な目にあるかことし、ゆへに拙き／(二十九丁オ)

筆なから其神宮境内のあらましを写して、後の日の思いひ出にと一枚の図にせし也、さきの日宰府に宿りし夜、同じ家にやどりし長崎の人とて、家内一類にや七八人のつれにて有りしが、又、はからすも此駅わか宿のむかいなる家に来り宿せしが、をといの日より湯屋にて日々出会けるに、稚児小娘までも携へ来りし有徳^{うとく}なる人か、夜昼もなく酒のミなんとせしやうすにて、たへず滞留したる線妓を呼て絃歌して楽しめるにや、ゆふべなどハいたく酒に酔へるにや、町中をいと声高く芸子共の名を呼て、夜更て其宿せし家の戸を叩くなど、いとそう／＼しく思ひぬ、もはや年の五十にもこへたらん人のかくそう／＼しきもいとたてし、されハ年老いたらんものハ毎事嗜るこそよけれ／

（二十九丁ウ）

○四日けふハ平戸のかたへ帰趣んとて、朝とく湯に入り宿屋^江も旅籠湯代共つかハしぬ、逗留して入湯すれハ一日□孔の銭をつかハせば幾度浴するもかまいなし、はたこ百六十に昼食料八十銅の程にて逗留せし也、ゆふへハ長崎奉行の用物夥しく来りしが、今朝ハ五六十駄も有らんか持出すとていとそうくし、長持なども数々有し、今夜ハ此駅止宿のはづとそ、此処を予も立出二里計の所を踏分て黒髪山⁴⁰に詣てぬ、本路ハ半里計も入て宮内といふ家村に至る、是ハ山へ登る、寺迄三十三町と也、一町ことに石のしるしを立たり、黒髪山の寺も普請中にて取ちらせり、ここハ三丁程も上に神殿有り、是も弊破していまた修覆にもかゝらず、神ハ少し下なる末社の白山の拝殿聊なる所に杉皮などをもてわつかの仮の御殿／

（三十丁オ）

入れ奉りぬ、近年此辺一統不景氣の時節とて、神靈さへも幽^{かすか}にをわしますもいとあやし、此上宮のあたりハ切立たることきの巖ありて上におゝふかことし、左右皆皆絶壁の大岩多し、夫故遠方よく見へぬ、早岐のかた迄も見ゆるといふ、此山より下りて又宮内迄出、半道程にて有田駅に出る、此里より焼物を今利^{伊万也}江出すに宮内を通り過る街道有、日々付出すと也、有田より一里半にして御境目木原に入るなり、木原より二里早岐里の庄屋^江着きぬ、黒髪山に立寄しゆへか思ひの外に道ひま入り、木原より少し先なる辺にて日もくれてたとるく／

○五日夜前より雨降り今朝迄やまず、朝ハ知れるもの共／

（三十丁ウ）

とひ来り又ハ用事も有りしゆへ四ツ時頃にもならんか立出たり、とかく雨もふりやます早岐ハもたせたる荷も少し益^増たりしゆへ、僕もつかれぬれハ、相神浦迄来、中里の庄屋へ泊りぬ、早岐里より此中里迄五里といふ

○七日朝とく中里を立て日の浦⁴¹まで六里海上一りを渡りて家に帰り着ぬ／

註

- 1 葛葉の宿。（熟語見当たらず）つた、あかざの宿（自宅の謙遜か）。
- 2 大谷忠蔵。松浦静山代の分限帳に「世知原大谷忠蔵切米六石」が記されている。地方給人。
- 3 廣川宴私。分限帳に「佐々、古川戸三郎、切米七石」とある。」地方給人。
- 4 譜代。平戸藩職制によると、足輕より下位、脇間^{わきま}者の同列で諸士譜代と呼ばれるもの。上中級藩士に属して用をたすものか。
- 5 郷医。平戸藩各地に置かれ郷村の医療を担当した。費用は其の地の高懸かりによつて維持された。分限帳に「平田元教（玄徳父か）早岐、五合三人扶持、銀十枚」。
- 6 今村楚八。法印松浦鎮信が朝鮮熊川より連れ帰った三川内焼の祖陶工巨関の子孫。今村楚八正和。
- 7 捻物師。三川内焼の窯場は、棟梁、捻物師、轆轤師、絵師、彫物師、子取り、窯焚き、窯塗りによつて組織されていた。捻物師は人物動物などを手捻りで作り出す。特に三川内焼の根付は珍重された。
- 8 押（押役）。早岐2、小値賀1、壱岐勝本1、鷹島1、大島1、調川^{つものかわ}1、生月島2、計九名。足輕を率いて、国境守備、キリシタン取締りなどに当たった。木村幸右衛門。平戸藩士高五十石御合力米二十俵。
- 9 筑前公（松平備前守）。第十代福岡藩主黒田斉清、佐賀藩と交代で長崎警備のため長崎出張の途次。

- 10 黒田美作。三奈木（甘木）黒田氏一万六千石、筆頭家老、大老、一万八千石とも。
- 11 大神宮。佐賀市伊勢町にある伊勢神社。
- 12 五穀神社。福岡県久留米市通外町。豊宇氣比売神、久留米藩家老稻次因幡正誠を祭る。寛延二年（一七四九）創建。
- 13 人形あやつり。五穀神社の祭礼では、あやつり（からくり）人形を始めとして、様々な興業が盛大に行われた。田中久重（からくり儀右衛門、寛政十一（明治十四）は二十にして一人前の人形師として、この時も製作に関っていた。後、万年時計製作、佐賀、久留米藩科学技術貢献、東芝になる会社起業。
- 14 願正寺。佐賀市呉服元町。慶長五年（一六〇〇）鍋島勝茂が建立。
- 15 龍造寺八幡。佐賀市白山。鎌倉時代鶴ヶ岡八幡の分霊を祭る。鍋島氏により手厚い保護が行われた。
- 16 日峯明神。佐賀市松原。現、松原神社、安永五年（一七七二）鍋島治茂が藩祖直茂を祭神として創建した。
- 17 高良山。福岡県久留米市御井町。筑後一宮、祭神高良玉垂命、八幡大神、住吉大神。
- 18 善導寺。久留米市善導寺町飯田にある巨利浄土宗大本山、本尊阿弥陀如来。
- 19 武陵の溪曲。陶淵明、武陵桃源境の記をふまえて景色の良さをいう。
- 20 毛利氏居城。（日隈城）毛利高政が佐伯に移る前の居城、元和二年廃城。
- 21 一ツ戸村の穴道。大分県中津市山国町。文化二年（一八〇五）建設されたトンネル。
- 22 羅漢寺。中津市本耶馬溪町跡田。曹洞宗本尊釈迦如来。奇岩と五百羅漢で有名。
- 23 宇佐神宮。大分県宇佐市南宇佐。応神天皇、比売大神、神功皇后、を祭る。中世には広大な莊園を支配して、大きな勢力を誇った。
- 24 四辻どの。羽林家、正二位参議、権大納言、四辻公万（一七五七～一八二四）
- 25 大貞の八幡。中津市大貞（薦神社）祭神、応神天皇、比売大神、息長帯比売命。
- 26 細川三斎。細川忠興（一五六三～一六四六）幽斎藤孝の嫡男、丹後宮津、豊前中津、小倉四十万石。

- 27 奥平家。享保二年（一七一七）奥平昌成丹後宮津より十万石で中津へ移封。
 - 28 飛鳥井どの。羽林家、従一位参議、権大納言、蹴鞠道家元飛鳥井雅光（一七八二～一八五二）。
 - 29 ゆす原八幡。柞原八幡、大分県大分市八幡。豊後一宮、創建天長七年（八三〇）祭神仲哀天皇、応神天皇、神功皇后。
 - 30 求菩提山。標高七八二米、福岡県豊前市久菩提。築上郡築城町寒田との境界にある。天台宗修験道の山。
 - 31 洞道。青の洞門、大分県中津市本耶馬溪町樋田。長さ三四二米、宝暦三年（一七六三）完成。
 - 32 あだし。異なっている。
 - 33 彦山。英彦山、福岡県田川郡添田町、大分県中津市との境界標高二一〇〇米。祭神天忍穗耳命、羽黒山（山形県）大峰山（奈良県）とともに「日本三大修験山」に数えられる。下宮の銅鳥居は鍋島勝茂の寄進。
 - 34 山家の宿。福岡県筑紫野市大字山家、長崎街道の宿場町。
 - 35 武蔵の湯町。現二日市温泉、筑紫野市湯町、筑前名所図会に言う薬師温泉のこと。
 - 36 塚崎の湯。佐賀県武雄温泉。長崎街道の宿場町。
 - 37 宇美八幡。福岡県糟屋郡宇美町。祭神応神天皇。お産に関する信仰が厚く、今も乳児を抱いたり子供を連れた家族連れの参詣者が多い。
 - 38 県氏。平戸藩士、五合二拾人扶持御合力米五十俵。
 - 39 長崎奉行。問宮筑前守信興。長崎へ着任した筒井和泉守政憲と交代して在府勤務のため江戸への帰途。
 - 40 黒髪山。佐賀県武雄市、伊万里市、有田市の境界にある。五一六米、山岳信仰の山。
 - 41 日の浦。平戸の対岸、渡し場、平戸を眼前に見る。
- （やまぐち・としゆき 佐世保古文書解説研究会
とよしま・さちこ 同右
ほうき・みちさと 同右
なかた・としこ 同右